



# みち 古道が紡ぐ物語



## 神武天皇東征の道③ (吉野・宇陀からヤマト入り)

熊野から八咫鳥に導かれ、神武天皇の一行はヤマト東南辺の山間地帯に到着したが、そこに至る記述は古事記と日本書紀では異なっている。ただ、記・紀ともに、最初に遭遇した大敵として描いているのが、宇陀の兄宇迦斯・弟宇迦斯（日本書紀では兄猾・弟猾）の兄弟である。

神武軍は、弟宇迦斯を帰順させ、兄宇迦斯を滅ぼしたが、現在も宮中行事として伝わる久米歌・久米舞は、この戦勝の宴で、「宇陀の高城に鳴震張る…」の天皇御製に、古代朝廷の軍事に携わった久米部の兵士らが合せて歌い舞ったのが起源とされる。

### 古事記におけるヤマト進攻順路

古事記によると、山岳地帯を越え吉野川の上流に到着し、そこで最初に出会ったのが国津神の苞直擔の子としている。梁を作って魚を取る氏族で、阿太の養鷄部の始祖である。「にえ」は神や首長にささげる収穫物・獲得物をいうが、神武一行の食糧調達に協力したとみられる。

さらに進み、吉野川の支流井光川（川上村大字井光）あたりで、光り輝く井戸から出現した尾のある神に出会った。吉野の首（地方豪族に与えられた姓）の祖先である国津神の井氷鹿である。

大字井光には神武東征時の多くの伝承があり、神武天皇巡幸の聖蹟として「井氷鹿の井戸」が今も残る。また、背後の御船山にある拝殿で波々迦の木（バラ科の落葉高木／古代には表皮に溝を掘って占いに用いた）を燃やし鹿の骨で卦を立てて占い、さらには御船の滝の巖上に「大塔宮」と呼ぶ小祠を立て「天乃羽羽矢（天から授かった矢）」を納め、進軍の勝利を祈願したといわれている。

尾のある神とする表現は、木こりが尾のように見える毛皮をつける習慣に由来する、あるいは、水銀の採掘時において地面に座るために毛皮を着けたことを表現したものともされる。

そしてさらに山を進むと、尾のある神が岩を押し分けて出てきた。名を問うと「私は国つ神。名は石押分の子。天つ神の御子を出迎えるために参りました」と答えた。これは吉野の国巢の祖（吉野町大字国栖あたりの土着の豪族）である。

ここで3人の土着の勢力を味方につけた後、さらに、山を越え路を穿って宇陀の下県（現在の菟田野と大字陀・榛原の南半分）に着いたことから、その場所を穿邑と名付けた。そしてここで、宇陀を支配する有力者兄宇迦斯・弟宇迦斯の存在を知り、戦の準備に入ることとなる。

### 日本書紀におけるヤマト進攻順路

古事記において神武天皇が3国津神と出ている地点を地理的に見ると、苞直擔の子と出会ったのは吉野川の川尻で、阿太の養鷄部の祖となっていることから五條市阿太の辺りと考えられる。しかし、ここは3地点では最も西で下流である。

井光が最も上流にあたり、少し下って国栖であり、阿太とは順序的には逆転する。

そこで、大台ヶ原の麓で吉野川上流にあたる和田（川上村大字北和田）の地を当てる説もある。

一方、日本書紀では、熊野から山を越え路を穿って「宇陀の下県に着いた。その場所を名づけて穿邑という。」と簡単に述べるに留めている。

そこで最初に、兄宇迦斯・弟宇迦斯に遭遇し、弟宇迦斯を帰順させ兄宇迦斯を攻略することで宇陀を平定している。その後吉野に巡幸し、3人の国津神に出会っているが、最初に井氷鹿に出会っており古事記とは順序が異なる。さらに、場所も吉野山の麓、現在の吉野町飯貝とされる。井光の比定地は川上村、吉野町に複数箇所存在するが、最も伝承が豊富に残るのは川上村である。

続いて石押分の子、苞直擔の子と、東から西へ



吉野の国津神井氷鹿を祀る井光神社（上）。川上村井光には神武天皇の伝承が数多く残る。桜実神社（菟田野区佐倉）と、その後ろが「八つ房杉」（右）



### 吉野・宇陀地域略図



吉野川の流れに沿って出会っており自然な流れである。古事記の誤りを日本書紀で訂正する説話を作ったか、あるいは複数の説話を神武東征説話にまとめられているとも考えられる。

また、養鵜部の祖である菟苴擔の子と出会ったのは現在の五條市阿太であるが、そこは「阿陀比賣神社」で神阿多都比売、別名木花佐久夜姫命を祀る一族が住んだ地である。この比売は神武天皇の祖父にあたる火遠理命（山幸彦）の母であることから、本来は同族であり、神武軍の食糧調達に協力したとも考えられる。

吉野川（紀ノ川）下流域は、和歌山の「名草戸畔」、あるいはかつらぎ町付近の「丹生都比売命」を祀る一族など神武天皇と元々は同族の分布が多い。しかし、ヤマト入りに容易な紀ノ川筋を遡れなかったことを考えれば敵対していたともみられ、菟苴擔の子に関しての古事記・日本書紀の記録は天皇即位後の話と錯綜しているのかもしれない。

### 兄宇迦斯を制し宇陀下県を平定

古事記・日本書紀ともに、最初の難敵として描いているのが、宇陀を支配していた兄宇迦斯・弟宇迦斯の兄弟である。神武天皇一行は、宇陀の穿邑で兄弟を呼び出すが、弟宇迦斯は帰順したものの、兄宇迦斯は、入ると挟まれる罟を仕掛けた御殿を作り神武天皇を討とうとした。

しかし、逆に殺されてしまい、大量の血が流れ出しくるぶしを埋めるほどであったことから、そこを菟田の血原と名付けたという。

この兄宇迦斯攻略にあたっては、「宇陀の高城」を築いているが、伝承では、宇陀市内に二つの候補があり、その一つが、東吉野から宇陀に入る菟田野区佐倉あたりとする説である。近くにある桜実神社境内に国の天然記念物「八つ房杉」といわれる杉の巨木があり、神武天皇が宇陀の高城に陣を張った時の御手植えと伝えられる。

少し行けば宇賀志の集落であり、兄宇迦斯の本拠地とされるが、現在の「宇賀神社」の辺りがその屋敷跡で菟田の血原とされる。

もう一つは榛原区赤埴の高城岳という説である。頂上には神武天皇を祀る小祠があり、晴れた日には大和盆地が見渡せる。その東側の裾野に血原という場所があり、菟田の血原の候補地である。

また、血原の地名であるが、水銀の産出地で地面が朱に染まっていたためともされる。

この頃には一時途絶えていた神武軍の消息も長髓彦に伝わり、この後、大和盆地入りにおける戦いがますます激しくなる。

（続く）（山城 満）